

多数言語話者高校生の言語認識と「戦略的 CS」

——「場」の期待と逸脱——

佐藤 美奈子（京都大学大学院）

1. はじめに

本研究は、複数言語話者のメタ言語認識と自身を取り巻く環境や会話の「場」に対する認識が、複数言語話者の言語行動としてどのように具現化されるかの解明を目的とする。日本の外国人受け入れ校に在籍する5人の複数言語話者高校生を対象におこなった言語意識調査と言語使用調査からは、日本語が圧倒的に優勢な日本社会で、それぞれ異なる言語背景をもつ複数言語話者である高校生が、居住地域や学校社会から発せられる規範や期待——どこでどの言語を用いるべきかの「言語 TPO」——を鋭敏に読み取りながら自身の複数言語能力を能動的に利用するさまが浮かび上がる。言語の機能のひとつに「互いの関係構築」(Tradgill, 1983)がある。単一言語話者が対話者との関係から相手との間合いを取り、単一言語内でスピーチレベルを調整するように、複数言語話者は、複数の言語にわたり「最適の関連性」(Sperber & Wilsson, 1995)を模索し、特定言語を選択する。それを可能にするのが「言語 TPO」を嗅ぎ取る、複数言語話者の鋭敏なコミュニケーション感受性であり、「場」の認識である。本研究は、生活言語と学校言語 (Cummins, 2000) の使い分けを求める学校や地域社会の「期待」のもとで、あえてそれから逸脱することで繰り広げられる CS を「戦略的 CS」と捉え、複数言語話者の「場」との積極的な交渉の在り方として解釈を試みる。

2.1 ドメインによる使い分けと CS

郭 (2005) は、「コードスイッチング」を【二つ以上の言語を状況や場面に応じて使い分けたり、一つの発話の中でも言語を混ぜて使うこと】(郭, 2005) と定義する。本研究では、郭 (2005) の定義の前半、つまり「状況や場面に応じて使い分け」ることを言語使用領域 (ドメイン) による使い分けとし、後半、つまり「一つの発話の中」での使い分けをコードスイッチング (CS) として2段階に分けて考える。

2.2 本研究のアプローチと着眼点

本研究では、言語の接触とそれに伴う一言語から他方の言語への移行を、複数言語話者の言語認識と会話の「場」との交渉という視点から捉え、「場」において交錯し、拮抗する2つの力の存在と、その方向性に着目する。2つの力とは、1つに「対談上の制約 (interlocutory constraint)」, 「干渉 (interference)」(Weinreich, 1974) という概念で示される、「場」の状況から発せられる力であり、「場」の磁力といってもいい。もうひとつは、発話者を、「意図する意味を伝え、目的を達するために意識的に文のスタイルを選択する」(三宅, 2015) 能動的な行為者として捉える視点によるもので、発話者から「場」へ向けて発せられる力である。そしてこの2つの力が具体的な形を取り、行動化されたのが CS であると考え。CS とは、すなわち、「場」の磁力と、それを感じ取る発話者の感受性、さらにその「場」の期待 (言語 TPO) に準じて、あるいはあえて逸脱して、特定の言語が選択されることで生み出される現象であるとする考えである。本研究では、そうした複数言語状況にも関わらずコミュニケーションが成立していること、そればかりか「多言語状況の管理」という形をとって成立している」(Calvet, 2001, 原文強調) ことに着目し、それを可能にするものとして、複数言語話者のメタ言語意識、コミュニケーションの感受性および特定言語の選択機序を取り上げる。

3. 調査——言語意識・使用調査

3.1 インフォーマント

インフォーマントは、東海地方 T 市の外国人受け入れ指定校である公立高校に通う3年生5人である。年齢は17歳から18歳、男子2名と女子3名である。当校は外国にルーツをもつ生徒を受け入れる学校であるが日本人の高校生も通う普通校である。当調査のインフォーマントは、そのなかの「外国人クラス」に1年生から在籍している。いずれも学校言語と社会の言語 (英語と日本語) とは別に、第3、第4の言語をもつ複数言語話者である。

3.2 調査 I～V と実施方法

調査は、2016年5月から10月までの6か月間にわたり、言語意識と言語使用に関する5つの調査——調査 I 総合的母語・ドメイン別「期待」認識調査、調査 II 言語位相 (ドメイン) 別言語使用調査、調査 III CS 意識調査、調査 IV CS

実態調査、調査Ⅴ フィードバック・ディスカッション——をおこなった。調査は、個別ではなく、意見を引き出しやすいよう質問紙を囲みながらグループディスカッションという形式をとった。そのためこのディスカッション自体が、英語を「媒介言語」とするインフォーマントの「相互行為能力」や we-code”・“they-code” (Gumperz, 1982)、グループダイナミクスを知る貴重な資料となった。

3.3 居住環境——T市外国人集中居住区

T市の外国人居住状況の特徴のひとつとして、同じ国出身の人たちが集中して居住し、出身別のコミュニティを形成しているということがある。たとえば「外国人集住地区」と呼ばれる H 地区の外国人比率は 45.59%を占め、全国的にも高い集住率となっており、そのうちブラジル人が 88.2%を占めている。同様の状況は、他の公営住宅においても別の国籍の集住という形で起こっている。たとえば、H 地区同様に外国人の比率が高い K 地区では、人口に対する外国人比率は 14.73%、そのうち中国人の比率は 67.20%を占め、中国人集住地区となっている。

3.4 「場」の「期待」——「学校言語」と「生活言語」 (Cummins, 2000)

本研究のインフォーマントの言語環境について特筆すべきことは、家庭語と学校言語をわけることを「期待」されているということ、特に学校においてインフォーマント自身の家庭言語を「混ぜる」ことが否定的評価をもって受け止められているということがある。その第 1 の理由は、CS を一方の言語の能力不足と捉える見方 (Reyes, 2004) が L2 学習の教室環境では根強く、CS が否定的に評価されてきたということがある。第 2 の理由は、カミンズ (Cummins 2000) の BICS と CALP の概念および「相互依存仮説」を理論的根拠とする、母語の重要性を説く立場から、家庭と学校の言語をしっかりと分けるよう地域の言語支援組織などを通じて勧められてきたということがある。第 3 の理由は、インフォーマントが在籍する学校は、一定数の外国人入学卒をもつ受け入れ校ではあるが、日本人学生も在籍しており、特に人数が多いブラジル人の学生が校内で集まってポルトガル語で話すことに対して必ずしも好意的ではないということがある。外国人学生自身、そうした周りの「期待」(抑制)を自覚し、それが先述の 2 つの力のひとつである「場」の力となっている。以下、調査Ⅰ～Ⅴでは、こうした「場」の力(期待)を感じ取るインフォーマントの意識と、その力に準じて、あるいは拮抗する形でとられた行為である CS と、それに対する意識をインフォーマント自身によるフィードバックも含めて考察する。

4. 調査Ⅰ 言語意識と総合的母語認識・調査Ⅱ 言語位相(ドメイン)別言語使用調査

調査Ⅰは、インフォーマントの複数の言語について Skutnabb-Kangas (1981)の多角的な母語基準——1 習得順序、2 能力、3 使用頻度、4 価値(広域性・専門性・威信性)、5 自動性(独言・計算)、6 情緒的絆——から判断し、自身の母語と認識するものを「総合的母語認識」として回答を求めた。さらに「場」の期待と言語「TPO」について、学校、社会、居住地域、家庭の各ドメインにおける認識を尋ねた。調査Ⅲ、Ⅳで示される実際の言語行動と比較することで「用いるべきと認識する」言語と実際の言語行為における選択とのズレを検証し、意識的・無意識的な選択の経緯を振り返る考察材料にする。

調査Ⅱは、ドメイン調査である。インフォーマントが、自分が置かれている状況——家庭と学校で言語を切り替え、学習言語と生活言語を明確に区分するよう「期待」されている状況——をどのように意識し、実践しているかを明らかにするためにドメイン別の言語の使い分けを調査した。

4.1 調査Ⅰ・調査Ⅱ 結果と考察

5 人のインフォーマントのうち第 1 習得言語と総合的母語認識でズレがあったのは、SAM と GAB であり、HIT もポルトガル語に英語が加わる形となった。SAM と GAB は、外国人居住地域在住ではないことや日本での家族環境の変化から家庭言語が日本語になっている。にもかかわらず英語を新しい母語と認識し、その選択基準を英語の国際語としての威信性に置いている。このことは CS に対する認識にも影響し、CS は「良くない」が、英語は国際語であることから、それぞれの「場」の使い分けを超越するものとして英語への CS は例外的に許容されるという考えを導いている。逆に自身の言語(SAM: ネパール語、GAB: タガログ語)は少数言語であり、威信性が低いため、日本社会での使用を認められないという、ある種の言語ヒエラルキー観を生んでいる。KIM は、ブラジル人地域に住むペルー人家族出身である。「日本社会から日本語、地域からポルトガル語が家族の言語(スペイン語)を圧迫しつつある」ことを懸念している。家族の言語として母語に対する情緒的絆が強い。INN は、家族というよりも祖国(中国)への情緒的絆から中国語を母語と認識する。中国人居住区に住み、中国人社会へのアイデンティティを強くもつ。中国語能力の保持を強く希求する。KIM と INN は家庭が日本への永住を希望しており、日本社会に溶け込むことを家庭の躰としていることもあり、CS に対しても周囲の日本人との調和を配慮することを CS の基準と考えている。一方、HIT はブラジル人地域在住で、学校でもブラジル人が多い環境にある。母親が日本に馴染めず、兄はブラジルへ帰国してしまったこともあり、日本社会に対して全般的に懐疑的である。CS に対しては、互いに通じる相手なら通じる言語で話すのが「自然」である(よって学校でも社会でもブラジル人が相手ならポルトガル語を使ってよい)という考えをもつ。インフォーマントの言語観は、その生育環境を色濃く反映している。

表 1 調査Ⅰ 総合的母語認識・ドメイン別「期待」

英：英語，日：日本語，中：中国語，ス：スペイン語，ペ：ペルー語，タ：タガログ語，ポ：ポルトガル語，ネ：ネパール語（以下，同様）

(性別・年齢)		SAM (F, 18)	HIT (F, 17)	KIM (F, 17)	INN (M, 17)	GAB (M, 17)
出身国・来日年齢		ネパール・13	ブラジル・13	ペルー・5	中国・13	フィリピン・13
現在の日常的使用言語		英/ネ/日	ポ/日/英	ス/日/ポ/英	中/日/英	英/タ/フィリピン語
総合的母語認識と認識の基準		英・価値 (威信性)	ポ/英・価値 (広域性)	ス/日・感情 (家族)	中・感情 (祖国)	英・価値 (威信性)
期待され ていると 認識する 言語	学校	英/日	英/日	日	英/日	日
	社会	日	日	日	日	日
	居住地	日/ネ	ポ	ポ/ス	中	日
	家庭	日	ポ	ス	中	日

5. 調査Ⅲ CS 意識調査

5.1 質問 1 CS を促進する状況と抑制する状況

- HIT：取り出し授業¹では、何語とかじゃなくて、**わかる言葉でつないでいていい時間**って感じ。
- SAM：HIT は、授業中、隣の席の Chris や KIM と話すときポルトガル語になるだろう。(略) **こここそ話**ならいいってわけ？
- HIT：何となく、ポルトガル語はみんなや先生にわからないから、**しゃべってるけど、しゃべってない**ってことになるっていうか。
- SAM：カタカナ語は、**日本語っぽく話せば日本語**になるから使ってもいいんじゃない。[tʃɔkɪt] じゃなくて、**チョ・コ・レート**。
- GAB：わざわざ下手に発音すればいいって、それ変だよ。**International language** なのに。
- INN：「国際語」って、GAB はいつもそう言う。**そういうの浮くよ**。(略) **ここではごちゃまぜが共通語**だけど、**普通クラスでは日本語が共通語**なんだよ。

CS を促進する状況は、取り出し授業など外国人生徒のみの状況や自分の持てる「言語リソース」(Young, 1999) を総動員して意味を伝えようとするとき、外国人同士で「わからない」状態を受け入れてもらえる状況。話題が言語に結びついているとき、内緒話ということであった。逆に CS を抑制・自粛する状況は、日本人と日本語が主流の環境、言語を混ぜることが歓迎されない、きちんと話さないといけないと意識するときで、伝えること自体を諦めてしまうこともあるという。

5.2 CS に対する意識——CS は「悪い・・・けど」

- SAM：混ぜるのは良くない。**文法的に間違っているから**。
- HIT：文法、っていうか、学校は、英語と日本語を話すのが**きまりだから**。(略) **相手がポルトガル語**を話せるのならポルトガル語でもいいんじゃない？
- KIM：「チャンポン」はダメだって、ちゃんと話さない、って。**言葉はマナー**だからって、家で言われている。
- INN：混ぜるのは恥ずかしいから、**ぼくはやめるね 語彙不足や能力不足を証明**しちゃうから。
- GAB：**タガログ語**は、混ぜちゃいけない、・・・でも、**英語は、国際語**なんだから、わからないほうが悪いよ。

5 人のインフォーマントはいずれも CS および言語の混用を「悪い」もしくは「仕方ない」と評価するが、その後、「悪いけど・・・でも」と続け、然るべき理由、許容される範囲、場合によっては納得し得る効果さえあることも自覚している。特に「言語による微妙なズレ」による CS の「必要性」については全員から聞かれた。Weinreich (1974) は、バイリンガルの CS・借用語の理由として「弁別の不十分さ (insufficient differentiated)」を挙げている。また、バイリンガルは、どの状況でどの言語で話すべきかに自覚的であり、いつ言語を切り替えたらいいかの手がかりと合図に鋭敏である。それが、バイリンガルの「コミュニケーションに対する感受性」であり、一言語内でのスピーチレベルによる調整を越えて複数の言語に跨って「最適な言語 (コード)」を模索して CS を導く要因となる。

6. 調査Ⅳ CS 実態調査・調査Ⅴ フィードバック

調査Ⅳでは、20 分ほどの自由な会話を数回にわけて採取し、2 つの特徴的なパターンが見出した。パターンⅠは、CS に後続する形で「Ah,」「Oh, sorry…」,あるいは舌を出してごまかす、苦笑い (本研究ではこれを「取り繕い反応」と呼ぶ)。

¹ インフォーマントたちが在籍する外国人受け入れ校では外国籍の生徒だけでなく、日本人の生徒も混在している。外国人生徒は、外国人特別枠で入学した生徒と普通試験で入学した生徒がいる。外国人選抜で入学した生徒を対象に、国語、社会、数学、理科などで「取り出し授業」と「放課後の日本語教室」をおこなっている。

² Chris はブラジル人、KIM は、インフォーマントのひとりでペルー人だがポルトガル語も理解可能。

他人のCSに対する「ほら～」, 「Wait, wait…」といった制止や注意の反応が見られるものである。一方, パターンIIは, そうした反応がみられず, 意図的にCSをおこなうもので, 本研究ではこれを「戦略的CS」と呼ぶ。その後, 調査Vでは, CSがおこなわれた箇所についてインフォーマント自身に振り返ってもらい, ディスカッション形式で意見を求めた。

パターンI 「独り言」

SAM: Why, umbrella? INN, you have an umbrella?

HIT: Yes, fine, it's fine today, so, why, INN, you always hold an umbrella, don't you?

INN: 就是 (だから:中国語), ah, because it was rainy, 我就 (それで:中国語), ah, so, brought an umbrella.

フィードバック: INN: 頭のなかで話を組み立てていると, 前のことについて「だから」とか, 「それで」とか, 独り言で言葉に出ちゃんだけど, そのときどちの言語で考えていたかによるのかな, (略) この前, 就是 (だから:中国語) って言って, 「あ, 間違えた」って思ったら, 错误 (間違えた: 中国語) って, それも中国語で言っちゃった。

パターンII 「仲間言葉」

(INN が, GAB の前に手を差し出し, 尋ねる)

INN: GAB, where is my *CHARI KEY*?

GAB: Oh, sorry, here.

HIT: Why do you have INN's *CHARI KEY*?

INN: GAB used my *CHARI* this morning after *ASATORE*.

フィードバック: INN: こういう言葉はすぐ覚えた. *CHARI, KETTA, KETTA MACHINE*・・・. 日能検³には出てこないけど.

GAB: Joanna は, 絶対使わない, って. 間違った日本語だって.

INN: だから, Joanna の日本語は日能検1級受かってても, 外国人の日本語だってすぐわかるって言われるんだよ.

GAB: 日本人が使っているのが間違ってる日本語で, Joanna の日本語が正しい日本語・・・?

7. 1. 3 「媒介言語」としての英語と「相互行為能力」

本研究のディスカッションからは, 複数言語を背景とするインフォーマントが英語を「媒介言語」(泉, 2009)とし, 各々の「相互行為能力 (interactional competence)」(Hall, 1993 ; Kramsch, 1986 ; Young, 1999)を駆使してコミュニケーションを「協働構築 (co-construction)」(Jacoby & Ochs, 1995)していく場面が多々見られた。複数の話者が各々知っている語彙で補い合う「持ち寄り型」や, 誰かが語彙に詰まれば誰かが補う「助っ人型」の会話展開でコミュニケーションが構築される。

8. 結論

複数言語話者の複数言語能力とは, 複数の言語を話す言語的能力のみを意味するのではなく, 会話の場を構成する力学を鋭敏に読み取るとともに, それに能動的に働きかけていく双方向的な行為を可能にする能力である。そしてCSとは, コンテキストが会話者に要求するものであると同じくらい, 行為者からのコンテキストへの積極的な働きかけでもある。本研究のインフォーマントである複数言語話者高校生らは, とすると単一言語状況に近い日本の学校・社会・家庭の強力な「期待」下にありながらも, ときには逸脱し, 「戦略的なCS」を打ち出す能動的な言語行為者といえるのである。

参考文献

- Calvet, L. (2001). 『社会言語学』萩尾生訳 白水社.
- Cummins, J. (2000). Language, power, and pedagogy : Bilingual children in the crossfire - books. google. com.
- Hall, J. K. (1995). (Re)creating our worlds with words: A sociohistorical perspective of face-to-face interaction, *Applied Linguistics*, 16, pp.206-232.
- 泉邦寿 (2009). 「複数言語使用における媒介」『媒介言語論を学ぶ人のために』木村護郎・クリストフ・渡辺克義 編, 世界思想社. pp. 42-63.
- Jacoby, S. & Ochs, E. (1990). Co-construction : An introduction, *Research on Language and Social Interaction*, 28 (3), pp.171-183.
- 郭銀心 (2005). 「韓国子女のコード・スイッチングの特徴」『在日コリアンの言語性』生越直樹・真田信治・任榮哲 編, 和泉書房. pp.159-193.
- Kramsch, C. (1986). From language proficiency to interactional competence, *Modern Language Journal*, 70, pp.366-372.
- Reyes, I. (2004). Functions of Code Switching in Schoolchildren's Conversations. *Bilingual Research Journal*, 28: 1 Spring. pp.77-98.
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). Bilingualism or Not : The Education of Minorities Multilingual Matters LTD.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986). *Relevance : Communication and cognition*. Oxford : Basil Blackwell. Second Edition.
- Trudgill, P. (1983). *Sociolinguistics : An Introduction to Language and Society* (2nd Edition). Penguin Books.
- Young, R. (1999). Sociolinguistic approaches to SAL Annual Review of Applied Linguistics, 19, pp.105-132.
- Weinreich, U. (1974). *Language in Contact Findings and Problems*, Mouton de Gruyter.

³ 日本語能力検定。本研究のインフォーマントらは, 高校入学後3級 (N3) から受験を始め, 3年間でほぼ全員が1級 (N1) に合格する。